

深刻な海岸漂着ゴミ問題の国際的な取り組みに思う

防衛大学校 建設環境工学科 正会員 山口 晴幸

1. はじめに～今までの調査経緯を踏まえて

筆者は 1997 年から開始継続している北海道宗谷岬・オホーツク海沿岸から沖縄県与那国島に至る全国主要海岸 718 箇所を数え上げた 92 万個以上に及ぶ漂着ゴミの国籍・種類等に関する成果を一度まとめ、深刻な漂着ゴミ汚染問題について論述した『漂着ゴミ～海岸線の今を追って』と題する書籍を 2002 年 6 月に出版する機会を得ている。その後も漂着ゴミの経年的推移量や季節的変動量などを長期的に把握することを主目的に、黒潮海流沿い琉球列島(主に八重山・宮古諸島)、太平洋沖合の小笠原諸島硫黄島・南鳥島、対馬海流沿い佐渡島・北陸沿岸などで、設定した主要海岸での定期的調査を継続してきた。さらに 2004 年春季調査からは、沖縄県西表島では天然の生態系保全バリアの機能を果している貴重なマングローブ林内を埋め尽くす漂着ゴミ調査にも本格的に着手している。

今まで調査した延べ 1000 箇所以上にのぼる海岸のほぼ 8 割で外国製ゴミを確認している。我が国の深刻な漂着ゴミ問題で、この外国製ゴミが問題となる海岸域は、黒潮海流沿いの南西諸島と対馬海流沿いの日本海側海岸域である。これらの外国製ゴミは、海流によって運搬されてくる遠距離漂流型の漂着ゴミである。特に印象に残った海岸域は、中国・台湾・韓国製ゴミが足の踏み場もないほど浜一面に覆い尽くしていた与那国島、西表島、石垣島、宮古島などの沖縄県八重山・宮古諸島の海岸域である。それと、外国製ゴミのほとんどを韓国製ゴミが占めていた長崎県対馬・壱岐から北海道利尻島・礼文島にかけての対馬海流沿い日本海近海上離島の海岸域である。一方、関東沿岸域などの太平洋岸では、深刻な海岸漂着ゴミ問題を引き起こしているのは、漂着ゴミの 9 割以上を占める圧倒的な量の我々が廃棄した日本製ゴミである。実はこの我々が廃棄した日本製ゴミもまた、遠々流れ太平洋上に浮ぶ外国の島々の海岸汚染を引き起こしている実態がある。東京から太平洋沖合約 1300km に浮ぶ小笠原諸島硫黄島に 6 度、さらにその東方海上約 1300km に位置する南鳥島(日本最東端島)に 2 度今まで上陸し、絶海の孤島に打ち上がった信じ難い大量漂着ゴミの実態分析から、その証を実証してきた。

言うまでもなく漂着ゴミ問題では、発生供給源・漂流漂着ルート解明、早急な防止処理対策の確立、近隣諸国との協議・協働活動などが不可欠で重要な課題であることは何度も指摘してきた。そんな折ようやく、環境省・(財)環日本海環境協力センター主催による日本・中国・韓国・ロシアの 4 ケ国の行政関係者と研究者らの専門家等が自国の海洋ゴミ問題への取り組みについて報告し、情報交換する「第 1 回北西太平洋地域における海洋ごみに関する国際ワークショップ」が、富山市で 2005 年 11 月 14 日・15 日の 2 日間の日程で開催された。筆者も招待発表者の一人として出席したので、日中韓露の防止処理対策に関する主要な取り組みと現状について概説し、今後の我が国行政機関の積極的な取り組みへの期待と、本ワークショップを通しての一層深刻化する海洋ゴミ問題に関する所感を記述する。

2. 「第 1 回北西太平洋地域における海洋ごみに関する国際ワークショップ」の趣旨と概要

主催者による初の本国際ワークショップの開催趣旨は、『海洋ごみは、海浜景観を損なうとともに、海洋環境の保全の面からも問題視されてきている。近年、日本海側を中心として外国から漂着したと思われるごみが多く含まれていることから、海洋ごみの問題に対応していくためには、近隣諸国と連携した取り組みを行っていくことが不可欠である。この会議では、NOWPAP 地域(日本海・黄海)において、海洋ごみ問題に関する情報交換を行うとともに関係者のネットワークを構築することを狙いとしている。会議には、北西太

キーワード：海洋ゴミ、漂着ゴミ、NOWPAP 地域、近隣諸国、防衛大学校 建設環境工学科

(〒239-8686 神奈川県横須賀市走水 1-10-20 Tel046-841-3810(内線 2368))

平洋地域海行動計画(NOWPAP)参加国(日本、中国、韓国、ロシア)の行政官・研究者等約 30 名が参加し、NOWPAP 地域における海洋ごみの現状及び取り組みの紹介、モニタリング方法やその結果の解析・評価方法に関する最新情報の交換等を行い、この問題について検討を行う。』ということである。ちなみに海洋ゴミは、一般に、海底に沈積している海底ゴミ、海面や海中を浮遊・移動している漂流ゴミ、海から海岸に上げられた漂着ゴミに大別されている。本会議ではこれらのゴミが海洋ゴミとされ討議が進められた。

まず国連環境計画(UNEP)のエリック・アドラー(地域海行動計画調整官)による基調講演では、世界中で年間 640 万トンのゴミが海に流出し、生態系・景観・水産資源に深刻な打撃を与えており、地球上の海全体が海洋ゴミで汚染されている。海洋ゴミ問題は国際的な問題と認識されていて、様々な取り組みがなされている世界の海洋ゴミ状況について報告がなされた。引き続き 2 件の特別講演では、海洋ゴミに関する NOWPAP 地域での活動と廃プラスチックによる深刻な海洋汚染について報告がなされた後、NOWPAP 地域 4 ヶ国(中国、日本、韓国、ロシア)の行政官による自国の海洋ゴミの実態や取り組み・企画等について紹介がなされた。中国では、めざましい経済発展に伴い廃棄物も大量に投棄され、陸域から海域に流出した廃プラスチック類や漁具類の海洋ゴミが急増しているとのことなど。日本では、国土の地勢的情况から近海の海流と偏西風の影響によって近隣諸国からの外国製ゴミの漂着が、琉球列島や日本海側離島・沿岸域の海岸で深刻な問題となっていて、正確な海洋ゴミ量を推定することが重要となることなど。韓国では、漁網などの漁具類、タイヤ、冷蔵庫、ポリタンクなどの大型ゴミを海に投棄することが多く、そのようなゴミが海洋ゴミに多く見られ、その行為の大半は漁業関係者によっていること。また海洋ゴミに対してリサイクルシステムや買い上げ制度を設けて、対策に取り組んでいることなど。ロシアでは、漂流・漂着ゴミよりもむしろ、底引き漁業用漁具類や海洋投棄された沈没船などの海底ゴミが処理対策上問題になっていることなど。ということであった。次に 4 ヶ国の行政官と研究者らによる 26 件の招待発表が、セッション(1): NOWPAP とその関連地域での海洋ゴミ分布のシュミュレーションモデルとモニタリング(9 件内日本 7 件、韓国 1 件、ロシア 1 件)、セッション(2): NOWPAP メンバー国での海洋ゴミの政策と管理(6 件内日本 1 件、中国 2 件、韓国 2 件、ロシア 1 件)、セッション(3): 海洋ゴミに関する様々なトピックス(9 件内日本 4 件、中国 2 件、韓国 1 件、ロシア 2 件)の 3 つのセッションに分けて行われ、最後に本ワークショップの総括がなされた。

3. 本ワークショップを通しての海洋ゴミ問題についての主な所感

海洋ゴミ問題への取り組みには各国間でかなり温度差のあることを実感したが、本ワークショップを契機に、NOWPAP 地域(日本海・黄海)の海洋ゴミ問題について近隣諸国と協議の場ができたことは有益であったと思う。しかし我が国の場合、年々、中国(台湾含む)・韓国からの外国製ゴミによる漂着が急増し、『漂着ゴミに埋れてしまう』という危機感を抱いている島や沿岸域も多く、早急な防止対策が強く求められていることから、近隣諸国から海洋越境移動して漂流・漂着するゴミ問題にもう少し的を絞って、発生源の防止処理対策について協議し、協力しあえる方策や環境づくりなどについて議論する姿勢が必要だと痛感した。以降に主な所感を列挙する。我が国の場合、海岸線を管理する各省庁で独自に取り組んでおり、国として統一的な方策・対策が確立されていない印象を受けた。また海洋ゴミの中で最もやっかいな漁具類ゴミに係る水産庁の姿がなかったのが残念であった。発泡スチロール製ブイや漁網などの漁具類の漂着は海洋ゴミの中でも極めて深刻である。さらに海中に放棄されたゴーストフィッシングによる海洋生物の大量死は一層深刻であると水産専門家からの報告があった。水産庁が主導し、海洋ゴミに関心のある水産関係の行政官や研究者などの専門家は、単に悲惨性を提示するだけではなく、是非とも、各種の漁具類の技術的改善をはじめゴーストフィッシングの発生防止対策や探査回収方法の開発等に具体的に取り組んで欲しいと痛感した。

中国や韓国では海洋環境保全に係る国際条約や国内法令などが 20 以上もあり、それらに基づいて NOWPAP 地域の環境保全に取り組んでいるとの報告があった。それなのにどうして我が国の島々の海岸が廃棄場と化すほどに中国製や韓国製ゴミが漂着してくるのか、今後、発生源対策で協力していく可能性も高いことから、もう少し明確な説明が望まれた。以上、海洋ゴミ防止軽減に向けた今後の討議に期待したい。